



## ナンコ

南九州から奄美地方にかけて、ナンコ（蔵鉤）という酒席の遊びが伝承されています。ナンコの起こりは平安時代とのこと。鎌倉時代の法然上人行状絵図に、ナンコを遊ぶ人の姿が描かれています。庶民の間で盛んになったのは室町時代。庶民が数字を覚えはじめた頃にできた遊びと聞いています。租税体系が確立し、節税のために計算の必要が出てきた時代。数字を扱えれば、租税をごまかし、自分の経済力を高め得る。そんな時代にナンコで計算力を鍛えたのでしょうか。現在では、大会も開催されています。



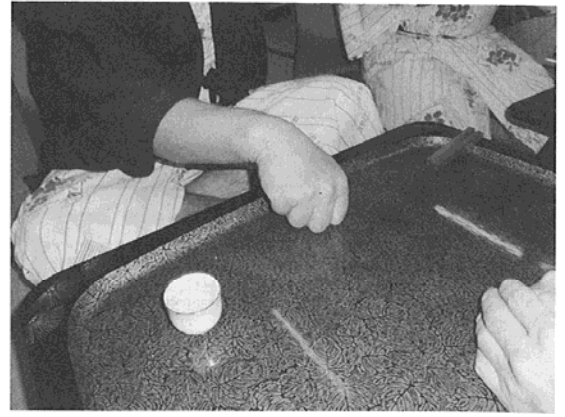
中嶋哲夫の

「人事も歩けば」



遊び方は次のとおりです。

- 1) 2人が向かい合って座る。
- 2) 10cmほどの木の棒（ナンコ）を3本もつ。
- 3) 手のなかにナンコを隠したまま、お互いが手を前に出す。
- 4) 先攻の人から順に、2人の合計本数を予測して宣言する。この時、本数の言い方に独自の言い方がある。ゲタンハ（下駄の歯）は2本、ゲタンメ（下駄の目）は3本といった具合。
- 5) お互いが手を開き、もっていたナンコの合計数を確認する。本数をあてた者が勝ち。



▲ナンコの隠し方

6) 負けた者が酒を飲む。引き分けると審判が飲む。

以上のようにルールは単純で、初心者でもすぐに参加できます。短時間で勝負が決まる単純なゲームです。しかし、実際にやってみると、ナンコの隠し方、本数の読み（とくに先攻の人の予測本数を手がかりに、後攻が相手のもつ本数を予測する）等の駆け引きが楽しめ、思ったより奥の深い遊びです。それに加えて、本数の呼び方、審判や観衆のはやし立てなどが重なり、賑やかです。研修後の懇親会の片隅で誰かが始めたナンコが、いつの間にか、大会になっていました（筆者は初参加、初優勝でした。ゲストだから華をもたせてくださったのだと思います）。

酒席は人と人の距離を近づける絶好の機会。昼間の公式行事とまったく異なるコミュニケーション空間を作り出し、お互いをより深く理解する。そのための道具として、ナンコが伝承されてきたのでしょうか。「焼酎とともにナンコも広がるといいのにね」。焼酎メーカーの方々と、そんな話をしていました。

（MBO実践支援センター代表）